
霊使いたちの日常

影霊使い-マナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊使いたちの日常

【Nコード】

N2931V

【作者名】

影霊使い・マナ

【あらすじ】

遊戯王でお馴染み、霊使いたちの日常生活物語

ほのぼののかなあ

いや、わからん！どうなるかは！

なにせやつらは自由気まだから！

ホント、僕疲れます。
by 闇霊使いダルク

だいいちわー

なんていうかな。とにかくやつらは自由気ままなんだ。本当に。まあ、毎日疲れる。この前だって、リビングでみんなで遊んでいたら、結局5人が暴走し始めて僕は端っこでゲームしなければいけない始末。まあいいけど。それが僕っぽいし。

なんだろうね。あの異様なテンション？僕にはどうもついて行けそうにないよ。しかも僕は後から来たから、まだあんまり馴染めない。

僕と同じ様に後から来たライナはすぐ入り込めてたようだけど……。やっぱり女の子同士だからだよな？

「ダルクーー!!」

む、あの声は。

僕が振り返る前に、ドンと思いっきり背中を押され、僕は顔から床に激突してしまった。なにこれ、むっちゃ痛いんですけど。

「だるくも一緒にあそぼうよー。みんなむこーにいるんだよ」

何とか、顔を起こす。やっぱりだ。後ろにいたのはウィンだった。緑きれいな髪はいわゆるポニーテール。可愛い顔立ちで、見た目 ^{グッ下} b なのだが、て僕はなにを説明してるんだ……。

「ほらーほらー」

ウインは僕の服の袖をひばっている。

「僕はいいよ。てか。なにしてるの？ みんなは」

「ん？あのねー、鬼ごっこー!」

「へえ、鬼ごっこねえ……」

うん。興味ない。あんまり走ったりするのは得意じゃないし、第一、今日は暑い。夏でもないのにこの暑さ。僕の相棒であるD・ナポレオンもうだうだしている。目に羽付いてるだけだけだね。

「鬼ごっこたのしーよー。私がねー逃げる役」

「へえー……」

どうでもいいんだけど……、てなんか今の台詞おかしくないか？
「私が……て、鬼ごっこは鬼一人だろ。ウインは逃げるやくなんだろ？ 私がーだと一人っぽいじゃん」

ウインは首をかしげている。

「ダルクのいつてことは難しくて分からないよ……。でも、逃げるのは私一人だよ？」

「……？」

今度は逆に僕がくびをかしげる。

「私が逃げて、みんなに追いかけてもらうの」

それって、ふるぼっこパターンだよな。

僕たちのやる鬼ごっこは、普通みんながやるような鬼ごっことは遠くかけ離れたもの。魔法を使って攻撃しようと何しようとなりだから、4対1ともなると、それはどう考えてもいじめのレベル。

でも、ウインは楽しそう。別にMとかっていうわけじゃない。コイツは単にバカなだけ。気付いてない。自分のポジションに。

「ほらーダルクもー」

「……もし僕が入ったらどっち側なの？」

「それはもちろんウインのほうだよー」

イジメデス力……？無理無理。死ぬって。だって向こうには、天敵、光霊使いライナがいるし、暴走少女（本人に言ったら殺される）エリアもいる。エリアは怖いよ。いつもは清楚な感じだけど……いや、確かにいい性格なんだけどね……。時々Sっ気が出るというか。うん。

「やっぱ、僕は棄権ということでファイナルアンサーで」

「むむ。しかたないなあー。よし！にげるぞあ。いくよ、プチリュウー」

一直線にかけるウインの後ろをプチリュウが何とか追いかけていつてる。

今日もうるさいうるさい。でも、ここでの生活はとても楽しい。さてさて、僕は子の大きな木の下で昼寝でもするのだろうか。

やっぱり木陰は気持ちいいな……。
眠くなってきたよ……。

ガッン。

「いったっ！」

いきなり頭に激痛。

まったくなんだよ……と、原因を探ると……

「エ、エリア……？」

「あははー、ダルク楽しそうだね」

なにを言ってるのだろう。てか、僕なんでけられた？ そりゃあ、
エリアはたまに怖いよ。でも理由無しに暴力ふるほど酷くは……

エリアがニコリと、怖いほどの作り笑いをした。

「理由なし？ へえー、理由無しと思ってるんだー。ちゃんと理由
はあるけどわからないの？」

頭をぐいぐいと容赦なく足で踏んでくる……。

なんで心読んでるんだ。

「あ、なんで？ そんなの簡単。ちょっとね、『心実の眼』を使わ
せてもらいましたー」

手の内読むあれか……。読心にも応用できるのか。

エリアの杖が僕の眼前に向けられた。

「えーと、あの。すみませんでした。許してください」

「いやだ」

エリアは小さく呪文を詠唱する。

どうやら、今日の僕のLPはここで終わったようです。

僕の意識は闇へと急速にダウン。

要するに、気絶した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2931v/>

霊使いたちの日常

2011年8月18日17時52分発行